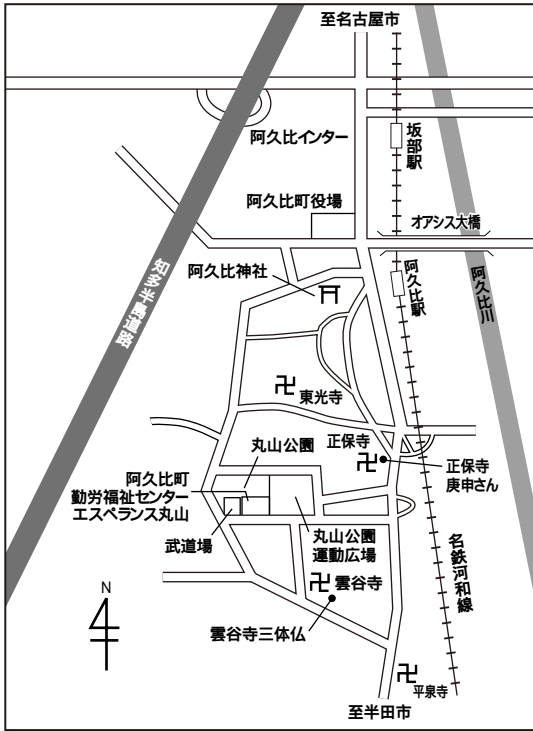


# シリーズ

## 阿久比を歩く ①①⑥



車の通りを見つめる「庚申さん」

「夢を託した競馬の有馬記念は大敗。年末ジャンボ宝くじは惨敗。幸運の女神に会いたくないよ。何かいいことないかなあ」。私の「ぼやき」を友人に聞いてもらいながら、二〇一〇年最初のぶらり旅をスタートさせた。椋岡地区にある「正保寺庚申さん」を見る。「庚申堂」と記された看板が掲げられたお堂の中に高さ一メートル弱の石像が置かれる。『町文化財調査報告』では、大祭がうるうる年の秋

# あぐいぶらり旅 石造物を巡る(阿久比・椋岡・美口・高岡コース②)

分の日に行われ、新しい鉄鍋などの金気の濁りを取り除くいわれがある」と解説される。石像は青面金剛像。庚申とは青面金剛の別称。『阿久比町誌』によれば、野ざらしになっていた石像に、子どもたちがいたずらをする、たびたびたたりが起ったため、お堂を建ててまつったと記述がある。中国に由来する民間信仰行事で、干支の庚申(かのえさる)の夜に、青面金剛像を徹夜してまつる「庚申講」がある。夜眠ってしまうと三尸(さんし)の腹の中にいる三匹の虫が罪を上帝に告げ、命を縮めるといわれる。椋岡地区でも各家庭を持ち回る「庚申講」の組織が大正末期まで残っていたようだ。講元で青面金剛像をまつり、庚申の日には夕食を食べた後に、盗難防止や道の安全を願う念仏を唱えたとされる。(徹夜をしたかは定かではない)。「庚申さん」は、役目を終えたと感じる、お堂の中から車の通りを静かに見つめている。ただ、心無

い何者かのいたずらにより、本来青色でなければならぬ顔が、赤いスプレーで塗られているのは残念。庚申さんに「お疲れさま」と声を掛け、次に向かう。場所を雲谷寺に移し、雲谷寺三体仏を見る。山門をくぐってすぐの境内西側に三体が並ぶ。きれいに整備された庭の砂礫を崩さないよう、飛び石伝いに、石仏の前へと進む。三体は江戸時代に造られた。右手を右ほおにあてがう石仏が中央に座る。痛い歯を押しさえているような珍しい姿。歯痛を治す仏だと伝わり「歯痛地藏」と呼ばれ、今でも手を合わせに訪れる人がいるとのこと。「いろいろな仏や神がいますよね」と友人が言う。「今年こそ幸運の女神を見つけたいなあ。なかなかほほ笑んでくれないけどね。君は?」。「新年早々開運の予感がします。近いうちにつれい報告ができそうです」。その先が気になったが、友人はそれ以上話してくれなかった。



中央が「歯痛地藏」